

刊行に寄せて

「戦争をしないとどうしようもないか」。この原稿を執筆している間に、衆議院議員である丸山穂高氏の言葉が物議をかもした。北方領土問題について「(戦争をしないと) 取り返せない」と、元島民の男性が記者の取材を受けているところに割り込んでいくような形で発言したのだ。本来であれば“越境”し交流を深めるはずの「北方四島ビザなし交流」の訪問団の一員として、国後島を訪問中のことだった。

ところがこの発言に対して、ネット上では「よくぞ言ってくれた」と、賛同の声も多く見受けられた。「戦争反対なんて、頭の中が“お花畑だ”」という言葉さえ飛び交った。こうした過激な言葉は、またたくまにSNSで拡散されていく。そうした書き込みに「いいね」や「リツイート」のボタンを安易に押す前に、皆さんにはこの本を開いてほしい。

本書はジャーナリズムやNGOの現場、さらには学術的な視点が共鳴し、重なり合った立体的な一冊となっている。平和とは何か、暴力は誰を追い詰めるのか、今私たちの周りに存在する国籍や国境といった“線引き”は果たして絶対的なものなのか、そして実際にその地に赴かなければ分からないこととは何かといった問いを投げかける本だ。そして読み進めるほどに実感する。冷静な分析は必要ではあるが、今求められているのは“冷笑”ではない、と。

私的な話ではあるが、この“越境”という言葉を受けて真っ先に浮かんだのは、父と母のことだった。国籍の異なる二人が互いを大切に思い、私自身が生まれたことを、今は誇りに思っている。

本書では、フィールド歩きから教育現場での取り組みまで、実体験を重ねることの意義が綴られている。もちろん父と母のことは、この広い世界の片隅の、ほんの些細な出来事に過ぎないかもしれない。けれどもそうした小さな実践の積み重ねこそ、平和の礎となりえるのではないだろうか。